

と書いているが、題をつけた人物、作曲者、初出版など具体的なことは分からないという。

以下、若干の資料をもとに「波蘭懷古」が軍歌になってゆく過程を考えてみる。

まずタイトルについて。

唱歌の研究者、中山エイ子氏から「波蘭懷古」は『中等国文読本』巻三（明治三十二年、訂正六版）に「騎馬旅行の一節」と注をつけて載っていると教えていただき、資料も送っていただいた。『国文読本』の編著者は直文なので、「その三」の一章を「波蘭懷古」と名づけたのは直文本人ということになる。

つぎに作曲者について。

『教育唱歌 前編』（明治三十四年 羽生芳太郎、香川実編）という音楽教育者のための指導書がある。全十五曲、「一二ヲ除ク外、悉く、新曲ヲ以テ編纂」（例言）したというように収載した十曲が香川の作曲になる。

ここに「波蘭懷古」と「阿爾泰山」（『騎馬旅行』で「つぎの五」にあたる章）の二曲が香川実の作曲で載っている。譜もついていて、「波蘭懷古」はwebで聞けるものとはほぼ同じである。

香川は東京音楽学校出身。これまで作曲者不明とされてきたのは香川の事蹟が広く知られていなかったからであろうか。

歌詞の違いについて。

「その三」の「こほりこそはれこのあした／霜こそおくれこのゆふべ」の部分が唱歌「波蘭懷古」では「こほりはりたりこのあした／おく霜白しこの夕べ」となっている。これは香川が改変したのでも、間違っで引用したのでもない。『国文読本』の本文がそうなっている。直文は『国文読本』掲載にあたって推敲したと考えられる。つまり香川がテキストに使ったのは『騎馬旅行』ではなく『国文読本』だったということとがわかる。

もう一曲の「阿爾泰山」については『新訂中等国語読本』（明治四十二年、直文編）に「騎馬旅行」として載っているが、これ以前の『国語読本』には「波蘭懷古」が載っているので香川が使ったテキストは『騎馬旅行』であろうか（更なる探索は必要だが、ここに仮説をたてておく）。

『教育唱歌』の目的が「師範学校、中学校、高等女学校、高等尋常小学校ノ唱歌科二、新材料ヲ供給センガ爲」（例言）であれば、素材を教科書に求めたのは当然で

あるし、二曲も選んだということは『騎馬旅行』は唱歌にふさわしい素材だと香川が判断したということである。

学生たちは国語の作品として、新体詩「波蘭懷古」を教わり、音楽の授業では唱歌としてメロディ・リズムを教えこまれた。二重に教わったものであれば記憶にも深くきざまれたであろう。彼らが学業を終えて赴いた戦地で歌ったものが「軍歌 波蘭懷古」として広まっていったと考えられる。

時代は日露戦争あたりからとなろう。

vi 付けたし

日露戦争に従軍した森陽外は戦地から「心の花」に「第二軍の歌」（明治三十七年二号）を寄せた。ロシアが清国を越境する様を告発した新体詩だが、そこに、

勇あり智なきす糸えでん

武運つたなきばおらんど

という一節がある。軍人として友人として陽外が「波蘭懷古」を歌ったかどうかは分からない。